

デザイン学生の海外留学効果

ーパシフィックリム・プロジェクトの取組みからー

多摩美術大学教務部国際交流室

パシフィックリム・プロジェクト事務局 竹中 佐織

Saori Takenaka

●はじめに

2007年7月号の『留学交流』で、「パシフィックリム・プロジェクトの取組」について紹介する機会をいただいてから4年が経つ。この取組みは、本学と世界有数のデザイン教育機関であるアメリカの協定校アートセンター・カレッジ・オブ・デザインが2006年から2010年まで実施した共同プロジェクトで、両校の様々なデザイン分野で学ぶ学生たちが、自然災害や高齢化などグローバルな社会問題をテーマに取り上げて行った共同研究である。毎年それぞれの大学から10名ずつ選ばれた合計20名の学生たちが（本学からは、グラフィックデザイン、プロダクトデザイン、テキスタイルデザイン、環境デザイン、情報デザインの分野から選出）、複数のグループに分かれ、文化、習慣、言語、価値観の違いのなかでリサーチ、ディスカッション、デザイン作業を経て、コンセプトを共有し、デザインを学ぶ学生として何ができるのかを提案した。学生たちは9月から12月にかけての14週間、毎年交互に多摩美術大学もしくはアートセンターでグループ作業を中心に研究を行い、10月半ばに中間発表会、そして11月末もしくは12月初めに最終成果発表会でその研究成果を発表し、ウェブサイトを通じて全世界に発信した。また、毎年プロジェクト終了後に、報告書として学生の編集によるパンフレットを印刷し、国内外の大学、企業、学生等に配布し、成果を広く周知している。

2010年で一度節目を迎えたこの日米間の共同プロジェクトだが、さらに進化した形で今後も継続していく予定である。



パシフィックリム・プロジェクトの冊子

●5年間の成果と課題

この5年間の成果には様々なものがあるが、その中の一つに参加学生たちのキャリア形成の広がりがある。プロジェクトに参加した総勢50名余りの本学学生たちの中には、卒業後アメリカやイギリスの大学院に進学した学生や、本学の大学院に進学した後ドイツの協定校に交換留学した学生もいる。また、今春卒業した参加学生の中には、シンガポールで働き始める者もいる。このようにプロジェクト経験者が卒業後の選択肢として、「就職」「国内大学院への進学」の他に、「海外留学」または「海外就

職」という選択肢をも視野に入れるようになったのは、明らかにこのプロジェクトに参加した影響であろう。また、アートセンターの卒業生たちには起業家を目指し、卒業後仲間とデザイン事務所を構える者も多い。彼らのそのような起業家精神に触れ、より自分の将来と可能性について真剣に考える学生が増えたのではないかと思う。

参加学生たちの人間的成長が顕著であることも特筆すべき成果である。本学では毎年プロジェクトを終了した後に、両校の参加学生たちにフィードバックをもらっている。これらのフィードバックを読んでわかるのは、本学の学生たちはアートセンターの学生たちから「勝つためのプレゼンテーション」や「プロ意識」など専門性について多くのことを学んだのはもちろんのこと、特徴的なのは、両校の学生たちがグループ作業を通して、「忍耐力」や「他人に耳を傾けること」などを体得し、専門分野とは別に人間としての成長を遂げていることである。アメリカのビジネス界のリーダーたちは、幅の広い、つまり、学生時代に全人的な教育を受けた人の方が管理職になるための準備ができていると聞いたことがある。このプロジェクトに参加した学生たちが、将来日米に留まらず世界的にデザインの分野で、リーダーシップをとれるような人材に育っていくであろうと、少しずつではあるが手応えを感じ始めている。



最終成果発表会

もちろん課題も多い。プロジェクトの時期が3年次の後期という就職活動や専門性を深める大切な時期に重なるため、その時期に日本を離れ、本学で専門の授業を受けないことは学生たちにとって機会の損失になる可能性もある。今後は、その点をカバーできるようなサポートシステムを構築していく必要があるだろう。そうすれば学生たちも安心してプロジェクトに参加でき、それがプロジェクトの持続性にも繋がっていくであろう。

もう一つの大きな課題は、学生たちの英語力である。語学は道具（ツール）であって目的ではないが、パシフィックリムのような国際共同プロジェクトにおいては、その道具を持っているか否かが、学生たちが自分の本領を発揮できるかどうか、また、十分に内容を吸収できるかどうかを左右する。プロジェクトは、アートセンターで行われるアメリカステージはもちろんのこと、多摩美術大学で行われるジャパンステージでもすべて英語で進行される。母国語でない言語で自分の考えを相手に伝え、議論し、それをカタチにするところまで持って行くのは至難の業であるが、これから国際舞台で活躍するデザイナーになるためには、どうしても避けて通れない関門である。本学は事前教育として、プロジェクト開始前の5月から7月にかけて、ネイティブの英語教員の協力の下、「English for Presentations（プレゼンテーション英語）」に参加予定の学生たちに週1回提供している。この授業の目的は、プレゼンテーションや、ワークショップ、あるいは議論を通して、学生たちが自分の考えを英語で表現で

きるように訓練することである。この授業は、英語でのプレゼンテーションに対する学生たちの不安を取り除き、プロジェクト本番にも活かされる結果となった。ただし、それだけでは十分ではなく、プロジェクトのクオリティーをより高めるために、参加学生の選考時に英語力にもっと比重を置くと同時に、例えば、選考後の夏休みに合宿型の英語集中コースを行うなどして、英語に対する動機付けを更に徹底して行う必要があると感じた。

また、学生だけではなく教職員の意識改革の必要性も感じている。2010年12月、アートセンターの卒業式に同席する機会を得た。アートセンターはterm制をとっており、その秋学期の卒業者は修士・学士合わせて120名程であったが、その多くがアジア系の学生であり、主に韓国や中国、台湾からの留学生と、アメリカ生まれの2世や3世たちであった。日本からの留学生は今回の卒業生にはおらず、日系と思われる学生が1~2名いた程度である。これらの日本以外のアジアからの留学生、およびアジア系移民の子弟が、アジア、アメリカ、ヨーロッパなどを拠点に、近い将来、デザイン分野でリーダーシップをとっていく可能性を考えると、日本として、また日本の美術デザインの高等教育機関として、今後何をしていくべきか、さらに真剣に考え、それを実践していく必要があると実感した。

●美術デザイン大学の国際交流のあり方

グローバリズムによる企業や社会のグローバル化は美術デザインの学生たちの就職や将来に影響を及ぼすものには違いないが、本学のように美術デザインを専門とする教育機関の場合、大学はまず創り出す場であり、語学は創造に寄り添うものであってほしいと願っている。我々にとっての国際交流は、いかに“創造”を刺激し、新しい創造へ繋げていけるものかどうかであると思う。そういう意味で、このパシフィックリム・プロジェクトが果たした功績は大きいと考える。

この共同プロジェクトは、いわゆる個人単位で行う交換留学とは異なり、いうなれば交換留学の団体戦である。そして、単にインターナショナルに混合されただけでなく、お互いの学校の方針やスタイル、グループメンバーの専門領域も多岐に渡るため、グループ作業もかなり複雑なものになった。しかし、学生たちは言語や文化、専門領域の壁など、それぞれの困難に立ち向かい、それを力に変えていった。いかに他者に耳を傾けるかについて学び、互いの個性や作業スタイルを尊重することを学んでいった。そして、多様なバックグラウンドを持つデザイン学生たちが異なる制作方法に取り組んでいくことで、実社会でデザインの仕事をするときには直面するであろう問題を乗り越える力を身につけていった。参加学生のフィードバックの一つに、「学生でいるうちにこういう経験をする事自体が学びの源泉だと思う」という意見があった。若者の内向き傾向が取り沙汰される昨今ではあるが、それを乗り越える可能性がこのプロジェクトにはあると信じている。

<参加学生のフィードバック例>

Q) プロジェクトを通していちばん学んだことは？

A) チームワークの意味を学んだ。自分がどこで貢献できるか、そして他のメンバーが同じように貢献できるようにどこまで譲れるか。プロジェクトを成功させる鍵は、それぞれの能力をいちばん活かせるところで発揮することだと思う。

(アートセンター学生／2009年ジャパンステージ参加)

A) 他学科との協力や連携で自分のフィールド以上のものを制作することができるということ。そういったこともふまえて、美術やデザインという枠を超え、科学や文学など様々な分野の人たちとコラボレーションして自分自身の視野を広げることが重要である。また、お互いに影響を与えたことで作品に還元できればさらに良いと思う。

(多摩美術大学学生／2007年ジャパンステージ参加)

Q) このプロジェクトに参加するのにいちばん大切だと思ったことは何か？

A) 心を開くこと。我慢。冒険心。

(アートセンター学生／2009年ジャパンステージ参加)

Q) 次回プロジェクトに参加しようとする後輩たちにひと言。

A) ものすごく大変だったが、多摩美生活だけでは到底気付くことのできなかった多くの事を学べた。語学力より大切なのは、相手を安心させることができる優しさと熱意だと思う。

(多摩美術大学学生／2010年アメリカステージ参加)

●学生たちへの動機付け

フィードバックを見てわかるように、実際にプロジェクトを体験した学生たちは、海外留学の意義を身をもって体感している。しかし、日本にいて美術デザインという特異な分野を学んでいる学生は、その重要さに気付く機会は少ない。我々国際交流に携わる教職員がいかにそれを学生たちに周知していくかが大切な鍵であると思われる。

その一つの例として、パシフィックリムのプロジェクトリーダーである和田達也教授が所属する生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻での取り組みを紹介したい。プロダクトデザインでは、学生たちを3グループに分け、そのうちの一つでは、ヨーロッパでデザインを学んだ教員が、卒業後に進学や留学を考えている学生たちを集めて

指導している。将来デザインが国際社会に貢献できる範囲は広く、それに対応できる人材を育成するために、専門教育の他に、日英バイリンガルのポートフォリオの作成や英語のインタビューの訓練も行っている。また、海外からの留学生の受入れにも積極的で、日本人学生が日本にいながら言語はもちろん異なる文化や多様なデザインアプローチに対する認識を深め、それに触発される環境作りに力を入れている。

また、本学は海外企業との産学共同研究も積極的に進めている。企業の外国人デザイナーが、本学の教員と共にインストラクターおよび講評者となり学生たちを指導していく。共通言語は英語であり、学生たちはプレゼンテーションも英語で行うことになる。英語に慣れない学生たちにとってはかなり厳しい環境かもしれないが、日本で、在学中にそのような環境に身を置くことは、実社会に出てデザインの仕事をするときには必ず役立つであろうし、学生たちが英語力を高めたいと思うきっかけになると信じている。

最後に、学生の“好奇心”と“勇気”を後押しするための仕掛け作りが大切であると考え。内向きの学生の好奇心をどのようにかきたてるか。いくら「英語を勉強しろ」「海外に行け」と言ったところで、興味をかきたてられるものがなければ人間は動かないものではないだろうか。交換留学経験者の帰国報告会や、前述したフィードバックの公開などはすでに行っているが、もっと幅広く海外を拠点に活躍している卒業生たちの生の声を次の世代に伝える場を今準備中である。できれば、本格的な就職活動が始まる前に、進路に対する視野を広げてもらうため、1・2年生を対象に行いたいと考えている。



パシフィックリム・プロジェクトの様子

● 今後の試み

本学の教育目標の一つに「国際社会に対応する幅広い教養を身につけた人格の形成を図り、現代社会に貢献する優れた芸術家、デザイナーならびに教育研究者等を育成する」がある。パシフィックリム・プロジェクトは、その目標を達成するための、国際的な美術家やデザイナーが集まる創造的な環境の構築に、微力ではあるが貢献してきた。しかしながら、本学でも学生の内向き傾向は否めない。留学時期と就職活動時期が重なることも、それに拍車をかけているであろう。このまま留学と就職が対立す

るものであっては、ますます国際社会・現代社会に貢献する優れた人材がこの日本で育ちにくくなるのではないだろうか。本学も美術デザインというフィールドで創造的な人材を育てる使命を負っている以上、このまま問題を容易に見過ごすことはできない。これまでの5年間に培ってきたものをこの問題にどのように反映し還元していくかがこれからの大きな課題である。

今、Design for Social Innovationという社会変革のためのデザインに世界中が注目している。Social Designというと発展途上国が抱える問題などを連想しがちだが、今回の東日本大震災のように、遠い国の話ではなく、もっと身近な問題でもある。これからはデザイン主導による社会変革に貢献できるデザイナー・研究者を育てる環境作りが急務である。パシフィックリムはデザインの複数の領域にまたがったInterdisciplinary Projectでもあったが、今後はデザイン分野に留まらず、科学、工学、経済、哲学等、異なる学問分野の学生、教員、専門家が一緒になり、Social Innovationに果敢に挑戦していく場としてのプラットフォームの必要性を感じている。そこには、本学の学生だけではなく、創造性豊かな学生たちが世界中から集まり、国籍、文化、言語、専門分野など様々なボーダーを越えた体験を通じて、日本発信の本物のcreativityを学べる場所となるはずである。それは、創造性を最大限に引き出し、デザインを通じて社会に恩恵をもたらすであろう。

●おわりに

パシフィックリムの5年間は学生と共に教職員も成長した5年間であった。文化や言葉、学校が違う上に、総勢20名の個性がぶつかり合うグループを指導していくのは教員たちにとって非常に果敢なチャレンジだったのではないかと思う。私のような職員にとっても、日米の学生と教員の受入れと送り出し、カリキュラムやプログラムの調整を行うのは非常に大変な作業であった。しかし、デザインの可能性を側で感じ、何よりも学生たちの人間としての成長ぶりを毎回実感する度に、このプロジェクトの意義を再確認してきた。今後はこのような機会をより多くの学生に提供し、国際社会に貢献できる人材を育てる環境作りに、大学として更に取り組んでいきたいと考えている。